研究ノート

立教大学観光学部紀要　第16号　2014年3月
Rikkyo University Bulletin of Studies in Tourism No.16 March 2014
pp. 125-131.

観光教育と文学研究
―交流文化学科での実践から―

Tourism Education and Literary Studies:
From the Practice of Department of Culture and Tourism Studies

舛　谷　　鋭*
MASUTANI, Satoshi

Abstract: Literary Studies are one way of Tourism Education in Institutes of Cultural Tourism Studies. Literary Theory of Literary Studies are important part of them. Department of Culture and Tourism Studies of Rikkyo University designated “Transcultural Literature” subject since 2006. I am lecturing in the subject as Tourism Literature Studies. Some of Literary Theories make good education in Tourism Education. e.g. Russian Formalism, Narratology, Speech Act, Reception Theory and Structuralism, Post-Structuralism etc. I feel they are valuable to students learning literary and Tourism Learning through the practice of the subject .

Key words: 観光教育（Tourism Education），文学研究（Literary Studies），文学理論（Literary Theory），観光文学研究（Tourism Literature Studies），交流文学（Transcultural Literature）

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　観光と文学
Ⅲ　観光学の枠組み
Ⅳ　文学理論と観光教育
　1）物語論
　2）言語行為論
　3）受容理論
　4）構造主義と脱構築
　5）歓待について
　6）ポストコロニアリズム
Ⅴ　テキスト紹介
Ⅵ　おわりに

Ⅰ　はじめに

立教大学の観光教育は，学部としては1998年から観光学科一学科体制で行われて来たが，2006年に交流文化学科を加え，二学科体制に移行した．現在全国に40を越える観光に関する学部・学科・コースがあり[1)]，観光文化学科の他，実質的には観光を対象とする交流文化学科等もあるが，本学の交流文化学科は観光経営系以外の観光学科として比較的早い時期に開設されている．奇しくもJTB交流文化賞が，「地域に根ざした持続的な交流の創造と各地域の魅力の創出，地域の活性化に寄与することを目的」とし，相前後して2005年に開始されている．

観光学科が経営系の科目を配しているのに対

＊立教大学観光学部・教授

表1　文学関連テーマの提出論文

卒論：	(2009)	演劇と観光　―劇団四季を事例として―
	(2010)	ガイドブックと観光への意識
	(2011)	ガイドブックによる外部評価がもたらす観光地への影響　―真鶴観光の今後を考える―
		旅の曲に歌われる情景の研究　―“ご当地ソング”等の歌詞を用いた「旅情分析」―
		旅の時空間における考察　―『パタゴニア』を題材として―
		旅行雑誌 Oz Magazine のつくる観光
	(2012)	観光ガイドブックの比較からみえる「まち歩き観光」の魅力に関する研究
		歌詞から見る川崎市
修論：	(2010)	ロマン主義運動と王政復古期のビアリッツの発展
		テキストマイニングを用いたトラベルライティング分析による観光シソーラスの構築
	(2011)	観光地における事業展開への「ストーリーテリング」の活用に関する研究
博論：	(2013)	19世紀フランスロマン主義作家の旅行記に見られる旅の主体の変遷

し，交流文化学科は準必修の「学科選択科目A-1」群（2012年度以降入学者カリキュラム．以下同じ）に「交流文化研究」1から4までを設置し，それぞれ，「地理学の方法」「文化人類学の方法」「社会学の方法」および「交流文学の方法」を，それらに次ぐ「学科選択科目A-2」群に「交流文学論」「旅行経験分析法」「言説分析」を，さらに「学科選択科目A-3」群に「トラベルジャーナリズム論」「トラベルライティング」等の文学関連科目を配している．

「交流文学」という科目は学科開設時から学科名である「交流文化」に対応した下位分類として設定された用語と思しいが，他に「旅文学」という名称も候補に上がったという．筆者はアジアのポストコロニアル文学の研究者として，学科開設以来，すでに用意された「交流文学」と取り組み，その枠組みと観光学部の中での教育的な位置付けを模索して来た．本稿はこれまでの経緯を踏まえ，交流文学を含む観光文学研究を，観光教育の面から考察する．

なお，学科完成年度の2009年度以降の卒業論文，修士論文，博士論文のうち，観光文学研究に含められるものの，現状では地域振興要素の強いコンテンツツーリズム研究を除く，文学関連テーマは表1の通りである．

Ⅱ　観光と文学

観光と文学の関係を考える際，狭義には文学ジャンルとして旅エッセイ，ガイドブック，またそれらの総称としてのトラベルライティングや，紀行文，旅行記など，より作家固有性の高い文学作品が対象として浮上する．一方，広義には文化事象あるいは物語としての観光全体を文学研究の手法で解釈する立場があり得る．後者の場合，意味を捉え難い特殊なテクストを解釈するため，主に二十世紀以降に蓄積された文学理論（現代批評理論）が，文学だけでなく，観光を含むあらゆる文化事象を「読む」ための武器となる．

たとえば観光研究の古典の一つであるジョン・アーリの『観光のまなざし』[2] がポスト構造主義者であるフーコーの『臨床医学の誕生』[3] を敷衍していることからも，観光研究の中に広く文学理論が受容されていることがわかる．以下は『まなざし』の一節だが，下線部について，文学理論の素養なしに正確な理解は難しいだろう．

> まなざしは社会化され<u>構造化</u>されている
> まなざしというのは<u>記号</u>を<u>通</u>して<u>構築</u>される
> 私たちが見えるものは種々の<u>記号</u>あるいは観光のクリシェである
> パリの恋人というような記号は，<u>換喩</u>としてはたらく

こうした語り口は複合領域である観光学部において比較的一般的で，教壇の上と下の齟齬を生み出す一因になっているケースが見受けられる．観光学部生は，基本的な人類学や社会学などを学ぶ

表２　二十世紀以降の知の潮流と重点の推移

前史（～十九世紀）：印象批評．伝記批評
1910 年代～：ロシア・フォルマリズム
1930 年代：ニュー・クリティシズム（新批評）
1960 年代：構造主義批評
1970 年代：脱構築批評
1980 年代～：歴史主義回帰
重点の推移：作者→テクスト（作品）→読者→コンテクスト（背景）

前に応用領域である観光人類学，観光社会学などに対面し，教員の論証の仕方が理解できない場合がある．一見誰でも経験できて楽しげな「観光」を事象として扱うがゆえに，講義の語り口や構造主義的な分析方法について，まるで未習の外国語に触れているかのような違和感を覚え，結局理解できぬ空白を残したまま四年間を終えてしまう学生もいるようだ．そうした意味で二十世紀以降の知の潮流（表２）である文学理論の学びは，初年次教育としての一面も持ち合わせているだろう．

Ⅲ　観光学の枠組み

上野は福祉学について．「専門職養成のための技法の集合と見なされ．学問とは考えられて来なかった[4]」と述べているが．観光学についても同様な捉え方はあり得るだろう．「～学」（discipline）であるならば，それらの基底に基本的な二項対立を置けるはずという見方がある．たとえば，人類学における自然／文化，地理学における空間／社会，社会学における私的／公的などだが，観光学にはホスト／ゲストを置くホスト＆ゲスト論[5]がある．これは観光を考える際に，根拠となる枠組みとして有効だが，こうした二項対立の組み合わせとして，観点識別のためのヤコブソンのコミュニケーション模式[6]（図１）がある．前記の知の潮流で言えば．ロシア・フォルマリズムに含まれ，構造主義の先触れとも言える．

コミュニケーション模式は，すでにこの定式化を敷衍した展開が文学研究で行われており[7]，各要素を作者／読者などと置き換えた例もある[8]．図２は文学研究への敷衍を参考に，それぞれの機能に最低限の観光要素を置いた私案であるが，複雑な観光文化事象を整理分析するための視点を与え，既存のホスト＆ゲスト論の拡充ともなるだろう．

Ⅳ　文学理論と観光教育

このように観光学の先行研究において，既存の二項対立を踏まえて拡張するほか，特に観光教育と親和性が高いと思われる文学理論には，ロシア・フォルマリズム以外にどのようなものがあるだろうか．今日までの教学経験を踏まえ，いくつかの例を挙げる．

コンテクスト（指示）
発信者（主情）…メッセージ（詩的）…受信者（働きかけ）
コンタクト：接触（交話）
コード（メタ言語）

図１　コミュニケーション模式

コンテクスト（地域情報）
ホスト（観光地，地域社会・住民）…メッセージ（観光資源）…ゲスト（旅客）
媒介（交通）
コード（体験）

図２　観光要素図式私案

1）物語論

広義の観光と文学で述べたように，旅の経験を「物語」と捉えたとき，物語論は観光研究と非常に近しいものとなる．物語は我々が物事を理解する仕方であり，文化の中心なのだという物語論の指摘は，旅の経験の価値を高める．人生は旅である，という隠喩を裏打ちするように，我々は旅の物語によって様々なことを学び，成長する．物語論によると，科学的な因果関係の論理より，物語の論理の方が理解を促しやすい．狼少年の話を三段論法（狼少年＝嘘つき，嘘つき＝信用できない，狼少年＝信用できない）で説明するより，狼少年の寓話を語った方がどれほどわかりやすいことだろう．旅の様々な経験に共通する要素を抽出するため，物語の潜在構造や物語分析のための方法概念の利用については，すでに観光研究で一部適用事例がある[9]．

2）言語行為論

観光体験によってゲストが促されるものに目を向けるとき，言語行為論の議論が適用できる．観光行為・体験がその現場から引き離しても有効であるような，事実確認的結果（constative），すなわち「これはこういうものだ」あるいは「このような事実がある」という認識をもたらすことがある．たとえばガイドブックの記述やイメージを，確認するような観光である．一方，行為遂行的結果（performative），すなわち「こうせよと促す，唆す」「真実と信じさせる」ことがある．こうした観光の例として，広い意味でのスタディツアー，たとえばダーク・ツーリズムやボランティア・ツーリズムなどが挙げられる．

3）受容理論

受容理論（読者反応論）は作家でも作品でもなく，読者がテクストをどのように読むかに注視するような重点の推移である．これはゲストがホストから観光資源をどのように受け取ったか，と言い換えられるが，読者の「経験」こそがテクストの意味であり，それらは独立した印象や感情ではない．観光における「経験」とはホストによってゲストが誘発された反応のすべてであり，体験後に整理された解釈とは異なる．通常それらの反応すべてを人に伝えることは不可能である．こうした見方はテクストがそれのみで自立して存在すると考えることへの批判であり，テクストには意味が内在し，読者がそれを取り出すという手順でないことを示そうとする．よって一般に言われるように，作者の意図は意味を止める釘ではない．ではなぜ，同じような「経験」が生まれるのか．並んで歩いて観光していても，二人の「経験」は全く同じではないが，何一つ同じでないということも起こらない．これは解釈共同体の存在による，ある範囲内での意味の特定を示しており，個々の読みと解釈は，特定の共同体の中で行われ，個人に先行して，いくつかの共同体が存在すると考えられる．

4）構造主義と脱構築

現代批評理論の中心は良くも悪しくも構造主義であろう．観光教育としての文学研究を考えるとき，その内容の半分以上は構造主義の理解にかかっていると言えよう．なぜなら，我々教員は前述の教壇の上と下の齟齬に見られるように，想像以上に構造主義，すなわち二項対立的な理解，整理を用いており，それを乗り越え，脱構築したとしても，前提として構築主義的な説明を排除し切ることはできないだろう．一部高校で二項対立的な現代国語指導は行われているものの，多くの学生にとって，抽象的過ぎる思考として即座に理解できないことが多い．アーリの例に見られるように，文学理論用語を知らず知らずのうちにクリシェ（決まり文句）として愛用する教員も少なくなく，複合領域である観光研究の中でも，観光文化学においてその傾向は甚だしい．

既出のホスト＆ゲスト論はじめ，観光教育の要素となる二項対立は少なくない．たとえば，自己／他者，主体／客体，日常／非日常，真正／非真正（ホンモノ／ニセモノ），居住地／観光地，わたし／あなたなどだが，前後で優劣すなわち権力関係があることを指摘するのは重要だ．それは，こうした例示が，すぐさま二項対立崩しである脱構築へとつながるからで，はっきり二項にわかれるのか，前後の優劣は確かなのか，そうした見直

しが脱構築の第一歩であり，新たな解釈の糸口となる．

5）歓待について

脱構築と相対化の果てに何があるのか．デリダは「条件なき歓待」[10] を提示した．これは相対化の果ての，暫定的な理想状態であり，事例として難民，移民などが示されているが，観光研究にとっては外国人という例を示すのがよいだろう．法の問題とも関わるが，判断基準が二項対立として脱構築され，合法／非法，善／悪，自己／他者（それぞれのアイデンティティ）に加え，西洋／非西洋までが融解する．

「歓待」は親切なもてなしのことで，「おもてなし」と言えばほぼ同義だろうか．“Hospitality”の訳語でもあるが，ラテン語源 hospes から見ると 1. 客，2. 主人，3. 見知らぬ人という奇妙な多義性があると言う[11]．客によって，主人は自分が最初の客であったことを想起する．こうした主客転倒状態は煙突から勝手に入って来るサンタクロースをはじめとした北欧神話からも見て取れるようだ[12]．これら脱構築研究の成果を，観光学の学術的根拠として取り入れることは今後の課題である．

6）ポストコロニアリズム

構造主義の延長として，差異（他者構築）を伴う領域に，民族，階級，ジェンダーが挙げられるが，それぞれポストコロニアリズム，マルクス主義批評，フェミニズムあるいはジェンダー批評に対応する．これらはコンテクストへの重点の推移とも言える．中でもポストコロニアリズムは現代観光の潮流が北から南へと向かっている状況において，有効な分析概念である．たとえば，アジアの中の西洋植民地建築を，コロニアルな雰囲気などと修辞して資源化することがあるが，オリエンタリズムを下敷きにしたエキゾティシズムとも言うべきこうした価値判断の，背後にあるものを暴き出す手段として，ポストコロニアリズムは欠かすことができない．異文化体験の仕方が観光倫理として整えられるためには，まずはポストコロニアリズムから出発すべきではなかろうか．

Ⅴ テキスト紹介

こうした，比較的観光事例と対照しやすい文学理論も一部にはあるが，実際には十九世紀以前の伝統的批評から，教学は非常に困難であるが精神分析批評や前節の三領域も含めた比較的最近の理論まで，総合的に教えることがもちろん望ましい．それは，構造主義と脱構築に見られるように，相補的な関係にある理論も少なくなく，ある事項の学びによって，別の事項が理解されることもしばしばあるからだ．

筆者は観光学部交流文化学科における当該科目（交流文学）開講以来，毎年テキストを変えて文学理論研究を講じて来たが，ここではそのうちの 4 冊を取り上げる．

筒井康隆『文学部唯野教授』[13] の種本として名高いのがイーグルトン『新版文学とは何か―現代批評理論への招待』[14] だが，400 ページを越える大部であり，半期講義のテキストにするには勇気がいる．幸い日本語訳者大橋洋一氏による『新文学入門―Ｔ・イーグルトン『文学とは何か』を読む』[15] があり，章立てもほぼ対応しており，ロシア・フォルマリズムから原著にないジェンダー批評まで，原著の例を補いながら説明できるのはありがたい．

次に，アメリカの代表的文学理論家であるジョナサン・カラーの『１冊でわかる文学理論』[16] も使いやすいテキストの一つである．本書は 200 ページ程度と量も適当で，説明が鮮やかでわかりやすく，元々大学のテキストとして編まれている．他のテキストであまり出て来ないカルチュラルスタディーズや，補遺の「諸理論の流派と運動」で網羅的なおさらいができて便利だ．

網羅的と言えばセルデン『ガイドブック現代文学理論』[17] だろう．本書は前述のコミュニケーション模式の文学への応用からはじまり，マルクス主義理論としてベンヤミンの『複製技術時代の芸術作品』[18] への言及があり，ベンヤミンの「アウラ」を観光の真正性の解釈に用いたり，観光地の衰退を説明できることが示唆できる．このようにポストコロニアリズム以外，ほとんどの文学理論を含んだテキストだが，記述が簡略・単調で，

前二書に比べると読む楽しみは得られにくい．事前に指定箇所に目を通させ，講義時に観光事例を加えて膨らませていく使い方が有効だろう．

最後に紹介するのは新書判，廣野由美子『批評理論入門―『フランケンシュタイン』解剖講義』[19] だ．小説技法編と批評理論編に分かれていて少々癖はあるが，シェリーの小説『フランケンシュタイン』を読みながら学んでいくところに特徴がある．各事項の説明はセルデン本に比べ更に簡略だが，一貫したストーリーの例で説明されていて，学生は読後にそれなりの満足感を得るようだ．

なお，批評理論のテキストを選定するとき最も頭を痛めるのは，絶版品切でないかどうかで，履修者数にもよるが，書店に教科書として注文できるか，毎年ハラハラすることが多いことを付記しておく．

Ⅵ　おわりに

観光庁の調査によると，観光関連分野に就職する観光学部・学科・コースの卒業生は16.1％にとどまる[20] とのことだが，本学においても宿泊，旅行業に加え運輸まで広く取っても30％ほどで，金融とほぼ同程度である．これは必ずしも学生の志望ばかりでなく，観光業界側もマッチングに積極的でない可能性を示唆している．この点については，一般に観光コースの教育について，産業界がリテラシー面で不信感を抱いているという意見をキャリア支援の現場で聞くことがある．観光文化系の学部学科は国際教養とかぶる面があり，語学力と異文化理解が期待されるのはもちろんだが，そもそも基本となるリテラシー（読み書き）が劣っていては元も子もない．こうした面からも，文学理論は確かな読みを身につけ，他の科目の理解にも有効で，複合領域である観光学にこそ，意義のある内容ではないかと考えている．

また，観光学の可能性を広げる試みとして，小文でもいくつか取り上げたが，観光例示による文学理論教本は意味があるだろう．日本文学者の中には，翻訳理論書によって文学理論を整理し，「言わば私自身のためのノート」として出版している例もある[21]．教育の具だけでなく，観光研究，ひいては観光学の構築のためにも文学理論の適用は有効であろう．

注

1）観光庁（2013）
2）アーリ（1989）
3）フーコー（1969）
4）上野（2013）
5）スミス（1991）
6）ヤコブソン（1984）p. 102.
7）スコールズ（1992）p. 39.
8）セルデン（1989）p. 9.
9）村上（2003）
10）デリダ（1999）
11）バンヴェニスト（1986）pp. 80–95
12）八木（2007）
13）筒井（1990）
14）イーグルトン（1997）
15）大橋（1995）
16）カラー（2003）
17）セルデン（1989）
18）多木（2000）
19）廣野（2005）
20）観光庁（2013）
21）真鍋（2007）p. 196.

文　献

アーリ，ジョン（加太宏邦訳）（1995）：観光のまなざし，法政大学出版局
原著は2011年にデンマークの地理学者Jonas Larsenとの共著で第3版が出ている．

イーグルトン，T（大橋洋一訳）（1997）：新版文学とは何か―現代批評理論への招待．岩波書店

上野千鶴子（2013）：『シリーズ福祉社会学』刊行に寄せて：UP，493，1–6.

大橋洋一（1995）：新文学入門―T・イーグルトン『文学とは何か』を読む．岩波書店

カラー，ジョナサン（荒木・富山訳）（2003）：1冊でわかる文学理論．岩波書店

観光庁（2013）：観光教育に関する学長・学部長等会議概要.

真銅正宏（2007）：小説の方法―ポストモダン文学講義―．萌書房

スコールズ，ロバート（1992）：スコールズの文学講義．岩波書店

スミス，V編（三村浩史監訳）（1991）：観光・リゾート開発の人類学―ホスト＆ゲスト論でみる地域文化の対応．勁草書房

セルデン，ラマーン（栗原裕訳）（1989）：ガイドブック現代文学理論．大修館書店
多木浩二（2000）：ベンヤミン「複製技術時代の芸術作品」精読．岩波書店
筒井康隆（1990）：文学部唯野教授．岩波書店
デリダ，ジャック（廣瀬浩司訳）（1999）：歓待について―パリのゼミナールの記録．産業図書
バンヴェニスト，エミール（1986）：インド＝ヨーロッパ諸制度語彙集 1．言叢社
フーコー，ミシェル（神谷美恵子訳）（1969）：臨床医学の誕生，みすず書房
廣野由美子（2005）：批評理論入門―『フランケンシュタイン』解剖講義．中央公論新社（電子書籍版有り）
村上和夫（2003）：観光の語りを虚構として分析する方法に関する考察．立教大学観光学部紀要，5
八木茂樹（2007）：「歓待」の精神史．講談社
ヤコブソン，R（池上・山中訳）（1984）：言語とメタ言語．勁草書房

■